

プラトンの『国家』を読了すると……

2022/02/19



塩見治人先生

名古屋モーツァルト協会の会員で、名古屋市立大学の名誉教授塩見治人(しおみ はるひと)先生が、昨年の秋の受勲で瑞宝中綬章を受賞されました。とてもおめでたいことで、とても嬉しいことです。塩見先生は、偉大な経済学者であるばかりでなく、音楽と文学にもご造詣が深く、いつも私たちに有意義なお話を種々聞かせて下さいます。素晴らしい方です。

その塩見先生から、先日、メールをいただきました。

昨秋の受章さわぎで9月に始めたプラトン「国家」を1月にやっと読了しました。
岩波文庫の藤沢令夫の名訳に大変感心しました。

プラトンの『国家』(The Republic)を読み終えたところのご報告です。快挙です。昔の学者は、カントの『三大批判書』を一巻ずつ読み終えると、そのたびに、家族で赤飯を炊いて祝ったそうです。きっと、塩見先生も、奥さまとご一緒にお祝いなさったことでしょう。

プラトンの『国家』

『国家』はプラトンの代表作で、古典のなかでも名著中の名著ですから、熟読玩味するには大変な時間と努力と能力と知識が要ります。塩見先生でさえ、『国家』の読了をととても喜んでおいでですから、特別な本であったのです。特に、『国家』は、社会の「正義」をあつかった「政治の本」といわれています。当然、あるべき理想の「国家」について、釈迦やキリストや孔子と並ぶ四聖人と称せられるソクラテスが思う存分語るのですから大変です。国と人民が必要とする経済や社会や哲学や芸術や道徳や倫理や宗教についても詳しく論じられています。並大抵な時間や努力や能力や知識では、とうてい読み切れません。塩見先生のような方にこそ、ふさわしい大著です。

(お弟子や仲間たちからなる)フロアとの(会話の)やり取りがあるとはいえ、ほぼソクラテスの独演ですね。大学時代の恩師を思い出しました。このようなスタンスでした。

この『国家』と言う書物は、ソクラテスがお弟子やお仲間と会話を交わしながら進めていく、独特の「問答法」(Socratic dialectic・Socratic Debate)で書かれています。話しているのはソクラテスで、それを記したがお弟子のプラトンということになっています。形式は、気の置けない「世間話」のような「おしゃべり」でできていますから、読みやすく、分かりやすく、どこも難解なところはありません。ときには、相手の揚げ足をとってからかう、ユーモラスな会話もあります。

旧友ケペロス老人との議論

私が一番好きな場面は、『国家』の冒頭です。ソクラテスがお弟子を連れて、近隣の都市のお祭りを見に行くところから始まります。壮麗な行列を観て、お参りもして満足して帰ろうとすると、その町に住むお弟子のポレアルコスがやってきて、「今夜、これから馬乗りの松明競争が始まるのにそれを見ないでお帰りになるのですか？」とソクラテスを誘います。ポレアルコスが、ソクラテスの一群を自宅へ連れていくと父親でソクラテスの旧友の老いたケパロスが待っていました。

「ソクラテス、めったに会えないのだからもっと頻繁に来てくれないといけないね。歳をとり、身体が衰えてくると楽しみも少なくなって、だれかを相手に真面目な話(議論)がしたくてそれへの喜びが増すのだよ」と大歓迎をしてくれました。

「年をとることは人生おいて辛いときなのですか？」と年下のソクラテスは訊きます。

ソクラテスは、早速、長老相手に「老いについて」の議論を始めるのです。この年が離れた仲の良い親友同士の和気藹々の会話は、一緒に聞いている若い者たちにとって、とても微笑ましくて、心温まるものです。プラトンが「国家」について真剣に論じるときに、この老人とのなにげない会話から始めるのは若者にも議論に参加して欲しいからです。深淵な難しい主題を論じるのに、このようにおだやかに始めるのはいいことです。なかなかいい出だしです。

ソクラテスは、長老が資産家であるので、「お金に愛着はありますか？」と訊ねます。

「お金は、正しく敬虔な生涯を送る者にとっては最大の効用をもつものだ」と答えました。

「大変立派なお言葉をいただきました。正しい生涯についてお話をお聞かせください」とソクラテスは本題に入ります。

「私はもうそろそろ、神にお供えをしなければならぬから失礼するよ。この議論は、お前さんたちにまかせるとしよう」といって席を立ちました。

やっと、念願のソクラテスに会えて、「老いについて」の議論が出来たので、ケペロス老人は満足して出ていきます。

ここから、長老からまかされたソクラテスと若者たちの間で、「正義とはなにか？」という議論が本格的に始まるのです。そしてこれが、『国家』全体のテーマとなります。

ギュゲスの指環の物語

『国家』のなかで、有名な「ギュゲスの指環」のお話も出てきます。

昔、羊飼いのギュゲスは、突然、地震が起きて出来た洞穴に入ります。なかにあった死体の指に黄金の指環を見つけました。その指環を付けて右側に廻すと自分の姿が消え、左側に回すとまた姿が見えるようになりました。この魔法の指環を使ってギュゲスは王宮へ忍び込み、王妃と通じて王を殺し、その国の王となりました。

さて、ここで弟子のグラウコンがソクラテスに問います —

「このギュゲスの指環が二つあって、その一つを正しい人が持ち、ほかの一つを不正な人がはめるとしましょう。この指環をはめた正しい人でも、いつまでも鋼鉄のような志操堅固な者など一人もいませんよ。市場で何でも好きなものをもってきて、これと思う人を殺したり、捕まっている人を解放したり、そのほか、なにごとにつけても人間たちの中で神さまのように振る舞えるのですから、結局、正しいことをする人も、不正なことをする人となんら変わることはなく、両者とも同じ事柄に赴くことでしょう。このことこそだれも自発的に正しい人間はいなくて、強制されてやむを得ずそうなっているのだということを。不正な人間には、神々からも人間からも、正しい人間に比べてより良い生活がもたらされるのです。不正の極致とは実際には正しい人間ではないのに、正しい人間だと思われることです」

これは良い提言です。世の中には、正義な人ばかりではなく、不正な人がいる原因をあらかさまに突いています。それに、不正な人間が、富も名誉もえて、褒め称えられている現実を語ります。これについて、ソクラテスがどう答えるか、興味のあるところです。ところが、これが『国家』がなかなか読み切れない原因のひとつなのですが、ソクラテスはこの提言に直接答えるのではなく、ここでもまた、視点をほかにずらしてしまうのです。

ソクラテスがそれについて意見を言う前に、グラウコンの兄のアデイマントスが口を挟みます。ソクラテスはこの「介入」を許します。この余分な論旨の「遮断」に対する読者の非難を恐れた『国家』の作者プラトンは、ソクラテスの言い訳を加えることを忘れません — 「彼が語ったことだけですでに効果は充分、ぼくを投げ倒して、『正義』を弁護することを不可能にしてしまったのだかね」。こういった「挿入」もこの対話からなる『国家』を臨場感あるものにしています。

アデイマントはいいます —

「グラウコンの意見をもっとはっきりさせるために、彼が語ったのと反対の立場の議論、つまり、『正義』の方を讃え、『不正』をとがめる議論も述べなければならぬからです。ソクラテス、あなたが唱える『正義』は、正しいことそのものではなくて、その評判であり、あなたがとがめるのは、不正な人間であることではなくて、不正な人間だと思われることなのだ。われわれのために、『正義』は『不正』にまさるということを言葉のうえで示すことだけでなく、それ自体としてそれ自身の力だけで、一方は善であり、他方は悪であることを示して下さい」。

なるほど、これは「道理」です。著者は、なかなか議論の展開に「隙」を与えません。このあたりが、長編の『国家』を安心して読み続けることができる精緻(せいち)な語り口です。さて、それでいよいよ、ソクラテスの明快な「正義・不正議論」が展開されて、長年の哲学や人生の課題になっていた重要な問題が解決される時が来しました。

大きな字で書かれた「国家の正義」

— と思ったら、ソクラテスはまた逃げを打ちます。

「この問題はよほどの鋭い眼力の人でなければ手に負えない問題であるとぼくには思われる。それで、小さな文字より、大きな文字の方がよく分かるので、ここでも、一個人の『正義』を考えるよりも、国家全体の『正義』もあるのだから、大きな国家の正義について学んだ方がいっそ学びやすいだろう。それで、国家において『正義』はどのようなものであるかを探求することにしよう」

おやおや、ここでまた、「正義」の話は、個人の問題から、一挙に国家の問題へと飛躍してしまいました。小さい文字より大きな文字の方がよく分かるのは分かるのですが、でも、大きな大福よりも小さな饅頭の方が食べやすいです。(笑い) この書物の題が『国家』なのですから、この論法は当然のなりゆきです。でも、この調子では、とてもついていけません。残念乍ら、今回の『国家』についてのお話はここまでといたしましょう。

塩見治人先生の読後感の一部

塩見治人先生は、『国家』を最後まで読み終えた読後感の一部を次のように述べておいでです。

<p>第5巻、当時のソフィストたちのポピュリズムに辟易しての哲人統治の提唱。なんとなく理解できます。しかし、ルソーの「一般意思」、ニーチェのツァラトオストラ、20世紀の社会主義、ナチズム、習近平体制、金正恩体制を思い遣ってしまいます。</p>
<p>第5巻には究極のジェンダー論があります。男女同一参画、男女同一教育、戦争への男女同一参加。</p>
<p>さらに、妻女の共有、子供の共有が論じられています。つまり家族の否定、私有財産の否定ですね。マルクスの『共産党宣言』を思い遣ってしまいます。</p>
<p>一番共感したのは、第9巻の民主制→僭主制→民主制→僭主制→・・・の循環制。政治力学論の論述。現代の日本政治、アメリカ大統領選挙を思い遣ります。岸内閣のつぎは池田内閣、民主党政権の後はアベノミクス・・・。トランプの後にバイデン・・・。</p>

なるほど、プラトンとソクラテスの『国家』論は、現代にまでつづいているのですね。現代を知るには、まず、古典の『国家』から。仕方ありません。さあ、また、改めて、読み直しましょう。大変です。

都築正道